
幻の輝き

ながと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の輝き

【Nコード】

N6438C

【作者名】

ながと

【あらすじ】

会社員岡嶋修平は、同じ会社の米田冴子と交際を始めることになるが、とんでもない出来事がまっていた。

出会い

米田冴子はぼんやりと夕陽を眺めながらかつて彼氏だった岡島修平のことを回想していた。付き合っていたのはほんの僅かの期間であつた。あいたくてももうその姿はこの世になく、冴子の脳裏に残っている残像しかなかった。そしてもうひとつ。

岡島修平は三角商事株式会社に勤務しており、今年で十年目を迎える。入社当時からシステム部のエンジニアとして、システム開発に従事している。彼には、同じ会社の庶務部に在籍している米田冴子という彼女がいる。彼女は短大を卒業して入社し、今年七年目になる。付き合い出してまだ三ヶ月である。

二人の出会いと同じ会社に勤務しているとはいえ、五百名以上いる社員の顔ぶれを知っているのはほとんどいない。二人が二年前知り合ったきっかけは偶然ともいえた。それも会社ではなく、アフターファイブの時間にお互いの存在を知ったのである。

その日修平は久しぶりに大学時代のゼミ仲間と居酒屋“たこ八”に足を運んだ。同期の河本裕二が結婚することになり、さらに沢木憲一が加わり六人で祝宴をあげたのだつた。当然、裕二のフィアソンセが同席することになったのだが、彼女の方も一人ではなんとなく恥ずかしくもあり、別に友人二人を連れてきたのであつた。その一人が冴子であつた。話の合間に自己紹介も加わる。修平が三角商事に勤めてますと言うと、冴子の隣にいた横田君子が

「あら、冴子と同じ会社じゃないの」

と少し大きめの驚いたような声で言った。

「冴子、知ってる？」

冴子はいいいと首を振った。

「よろしく」

と修平が少し照れたように笑い、右手で頭の後ろをかきながら座つ

た。その時は二人に何事もなく時間が過ぎ、祝賀会は終わった。みんな思い思いに帰途についた。冴子は帰る道すがら、修平のあの時の照れた笑いを思い出していた。それから三日が過ぎた。

午後六時過ぎ修平は仕事を終え、タイムカードシステムに退出時間をスキャンすると部屋を出た。システム部は八階にあり、エレベーターの前には同室の小柳武雄が降りてくるエレベーターを待っていた。修平が前まで行くと丁度、右側の一基が九階にいた。

「ラッキー」

と、少しはずんだ声で小さく囁いた。

「やっと来ましたよ、先輩！ここに来た時はもう二つとも下でした。」

エレベーターが止まり、扉が開いた。中に三人が乗っていた。ベーターは定員十二人の大きさである。二人は乗り込んだ。扉が閉まり下へと向かう。七階六階と通過し、五階で止まった。扉が開き、その前に二人の女性が待っていた。

「あつ、どうも」

乗り込む女性の一人に修平が頭を少し下げて挨拶した。

「お疲れ様です」

と、冴子が返した。

「知ってるの？」

武雄が右肘で修平の脇腹を突付きながら、耳元で囁いた。修平も左手でつつき返した。

エレベーターは一階に到着した。修平は玄関の所で武雄と別れた。

「また、明日な」

修平は地下鉄東山線で通勤しており、武雄はバスで通勤している。右に行くと地下鉄栄駅に通じる地下街へ行く階段があり、バス亭はまっすぐ歩いて久屋大通にあるオアシス21にある。

修平の前を冴子が歩いていた。同僚と話しながら歩いていた。五分ほど歩くともう駅へ通じる地下街である。改札を入り階段を降

りて地下鉄のホームへ着いた。冴子は同僚とさよならの手を振って別れて並んで乗車を待っていた。偶然同じ方向であったのだ。修平は意を決して声をかけることにした。ドキドキであったが、とりあえず食事に誘うのに成功した。

私ここだから。本山の駅だった。冴子が降りていった。修平の顔にはうつすらと微笑みが残って、それが地下鉄のガラスに反射していた。

「じゃ、明日食事に」

「はい」

と、冴子はかわいらしく返事をした。翌日は金曜日であった。それから、二人は何気なく付き合い出し、毎週のようにデートを重ね、三ヶ月の歳月がたっていた。

友人と謎のメール

ある土曜日の夜、日付は平成十年十月十八日であった。午後九時くらいであつたろうか、電話が鳴り、修平が出ると、懐かしい声が聞こえた。というより、最初は誰かすぐにはわからなかった。

「修平か」

「そうですか」

「俺だよ、慎一、近藤慎一だよ」

「???うーん」

「高校で隣の席だった」

「あつ! 慎一か、いや懐かしいな、元気か? どうしてる?」

「話は今度会つたらな。修平、メールアドレスもってるか?」

「あつ」

「一寸送りたいものがあるんで、教えてくれ」

「ああ、いいか、言うぞ」

「うん」

「shuhei@net|world.ne.jp」

「ありがとう、しばらくしたら届いていると思うけど、決して他人に知らせたらだめだぞ、いいな」

「ああ、わかった」

「俺とお前の中だからな。今度ゆっくり話すよ。じゃ、バイバイ」

「あつ、それじゃ元気だな」

電話を切つて修平は何だ突然に、変な奴だなと思いつながら、風呂に入る準備をし、ゆっくり風呂に入り、体と頭を洗い、さっぱりとした気分になった。テレビをつけてみたが気にいらぬ番組ばかりだった。ニュース番組を見た後は、明日の日曜日は朝早くから冴子とのドライブがあるので寢床についてしまい、メールのことはすっかり忘れていた。

火曜日の夜、帰宅してテレビをつけると九時のニュースが丁度

始まったところであつた。冷蔵庫から缶ビールを取り出し、蓋を開け、一口ぐつと飲むと、自分の眼と耳を疑った。それは、テレビで近藤慎一が何者かによって惨殺されたという内容であつた。そのニュースが終わらないうちに、修平はメールのことを思いだした。慎一が殺された訳はそのメールに隠されているのではないかと閃き、寝室においてあるパソコンの電源をONした。

修平はパソコンが立ち上がると、デスクトップアイコンのメールソフトをクリックした。Outlook Express が起動し、しばらくするとメールの受信が始まった。二通のメールを受信した。一通のダウンロードはかなり長かった。一通は会社の同僚の沢田からであつたがそれは開封せずに、肝心の一通をクリックして開封した。

メールの内容を見て修平は戦慄が走った。

書き出しはこう始まつていた。

「このメールを見た頃にはもう俺はこの世にいないかも知れない」
(どういうことだ?) と思いつつ後を続けて読んだ。

「ある物を手に入れたので命を狙われている。このままでは、その組織に奪われてしまうだろう。とても大切なものだ。キーとなる地図を貼付する。そのキーを頼りに次のホームページ `mystery.com` にアクセスして欲しい。全てにパスワードがあるが、お前の渾名にしてある。では、俺の宝を守ってくれ。成功を祈る。地獄で閻魔大王仲良くなるよ」

これは大変なことになったと思つたが、この胸の内を話すことはできない。話の内容からすると自分の命も危ないと思えるからだ。

修平は缶ビールをグツと飲み干すと、貼付されているファイルを開いた。パスワード入力画面が表示された。パスワードは渾名とあつたから、“マントヒヒ” 入れた。地図が見えてきた。スクリーンで読み取られたと見える地図は古そうなものであつた。地図にある文字はヨーロッパのものと判断できたが、どこを表すかは皆目見当がつかなかった。右端上部には髑髏のマーク、左端下部には毒蛇ら

しいものがあつた。あとは山と木が三本描かれており、中央右寄りにクローバーのマークが一箇所、その下に謎めいた文字が書かれており、その右にローマ数字で”13”とあつた。

修平にはその地図を見ても何が何だかわからなかったが、重要なものであることは確かであつた。ヒヨツとして、宝の隠し場所なのか、でもそうだとしたら何故、あいつがもつていたのか、謎がさらに疑問を呼ぶ。

修平はとりあえず、慎一のホームページを見てもみることにした。見ないことには先に進まないからだ。だが、それ以上に知ることに対する恐怖も覚えていた。

アドレスを入力してしばらくすると、画像が表示され始めた。髑髏のマークやグロテスクな物体があり、ミステリーツアーへようこそとある。その文字のしたに扉がある。扉をクリックすると、表示が変わり別の扉が表示された。扉といっても鉄格子だ。その下に鍵がかかっており、文字を入れるようになってる。修平は渾名を入れた。画面が雷鳴が轟くようなイメージで変化した。

『修平、よく来たな。ここはとりあえずお前しか来れないよう工夫がしてある。だが、ここにある資料は送った地図の手がかりにしか過ぎない。後はお前が探すのだ。資料にはそれぞれキーが隠されている。それを解くと隠された宝物の有りがわかるはずだ。最初は左上にある十字架からだ。幸運を祈る』

修平は十字架をクリックしてみた。新しいページが読み込まれ表示された。まずハーケンクロイツがでかく表示され、顔写真が徐々に画面にあわわれた。それは、見たことのある顔、あのヒトラーの写真であつた。十字架にヒトラー。

「ナチス・・・」

と修平は小さくつぶやいていた。何故ナチスが関係するのか全く判らなかった。いつの間にか修平は眠りについていた。

修平はヨーロッパにいた。どこかはわからないが、農村を歩い

ていた。見る風景は皆始めて見る光景であり、興味深く左右を見ながら歩いた。道は一本道であったので、気の向くまま歩いた。数時間歩いたところで、街が見えてきた。街に近づくと人々はこちらを見ては、驚愕した顔をして退散していった。この俺は何か変か？恐いのか？皆目わからなかった。街の中に足を踏み入れた。

向こうから馬に乗った二人が近づいてきた。その姿は中世の騎士を彷彿させる格好であった。これは祭りか何かのイベントがあるのだと思い、よしまたとないチャンスだから、ゆつくりと見てみよう。道路の脇に腰を下ろそうとした。馬に乗った二人はすぐ傍らまでやってきた。何やら話しているが、何を言っているのか全然わからない。槍を手にしておりその手に力が加わり持ち上げようとしているのがよくわかった。恐怖を覚え、身構えた。

相手は槍を繰り出した。身構えていたおかげで一瞬の隙に身をかわした。しかし、さらにもう一度一突きされた。今度も間一髪の所で槍先は地面に突き刺さっていた。修平は立ち上がり必至で逃げた。相手は馬であり、すぐ追いつかれる。目の前に小さいが川が流れていた。命からがらとはこの事を言うのかと思いつつ小川に飛び込んだ。あとは流れに任せて必死に泳いだ。どの位たつたろうか。川岸にぐつたりと気を失い横たわっていた。

気がつくとも目の前にきれいな女性がいた。だが朦朧としている修平は再び気を失っていた。

気がつくとも、窓から陽光がさしこみベッドを輝かせていた。その上に修平は寝ていた。

しばらくするとドアから貴婦人のような女性が暖かいスープをもつてあわわれた。

「気がつきましたか？暖かいスープをめしあがれ」

とスープを差し出した。修平はスープをとりスプーンでスープをすくい、ゆつくりと一匙目のスープをゴクリと飲んだ。その容器もスプーンも見ただけでもないすばらしいものであったが、その味はまた格別なほどおいしかった。

「美味しい！」

思わず声を出してしまうほど本当に拔群であった。修平はその婦人に聞いた。

「ここはどこですか？」

「ハウエル公爵の館です。私はこの娘でクリスティーヌと言います」

「????」

修平は何が何だかわからなかったが、目の前に美人がいることには違いなかった。

「ここは安全です。ゆっくりとお休みなさい」

というと、部屋から出ていった。疲れからか再び寝込んでいた。気がつくあたりはすっかりと暗くなっていた。ミシミシと歩く音が聞こえた。扉が開き誰かが入ってきた。また

先ほどの美人かと思い近づいてくるほうを見ると違う顔だった。月明かりに現れたその顔は、全身を膠着させるものであった。手に持っていたのは、キラツと光るナイフ。それを上に上げ

「宝の隠し場所を言え！」

「そ、そんな物は知らない」

「嘘はついても無駄だ」

というと、そのナイフが振り下ろされ、足に刺さった。

「アアッ！」

修平は寝ていた椅子から床に落ち我に返った。

「何だ？夢か」

と、小さくつぶやいた。修平はこんな夢を見たのは始めてであった。

床に就いたがしばらく眠ることができなかった。夢での出来事が脳裏から離れなかった。「ピピピッ！ピピピッ！」

突然目覚まし時計がけたたましく音を立てた。修平は手探りで時計を探し、眠気をさまた

げる音を止めた。しばらくして、寝不足のような顔をして修平は

ベッドから起きあがった。

修平は昨夜の出来事が夢のような現実のような不思議な思いがあったが、夢だとりあえず思うようにし、顔を洗い、トイレにいったあと、別に食欲もなかったので、コーヒーだけを飲み、慌てて支度をして会社にでかけた。電車の中でも夢での出来事を考えていた。

携帯を取り出し中島康平に電話をかけてみた。呼出し音が数回鳴ったあと、康平が出た。

「もしもし、中島です」

「俺だ、修平、岡島修平」

「おう、修平か？久しぶりだなあ、元気か？3年ぶりか？」

「それぐらいになるかな」

「朝から何のようだ？」

「近藤慎一のニュースを見たか？」

「おう、見たよ。慎一殺されたんだ。今日の夜にでも電話をしようと思っていたんだ」

「葬式何時かしってるか？」

「いや、知らない。後でお父さんにでも電話して聞いてみるよ」

「じゃ、後で教えてくれ」

「ああ、わかった。あとでかけるよ」

「バイ」

電話を切って会社へ急いだ。

「修平、おはよう！」

同室の河本が会社の手前で姿を見つけ声をかけた。修平はぼんやりしていたのか、考えごとをしているように見えた。

「オーイ！修平」

と、河本が修平の肩を叩いて呼び止めた。

「ああつ、裕二か、おはよう」

「元気がないぞ？風邪でも引いたか？」

「違うよ。一寸考え事をしていたから」

「それならいいけど。元気だせよ」

河本が修平の肩を軽く叩いて言った。

「ああ」

その日の仕事は夢での出来事がどうも気になり、慎一のメールも気になった。夜7時過ぎに冴子とレストランへ食事に行った。

イタ飯である。そのレストランは値段が格別に安いわりに味は抜群であり、いつも満席に近かった。

「修平さん、今日会社で何かあった？」

「エッ、どうして？」

「だって、すぐく落ち込んでいるように見えるけど」

ワインを冴子はおいしそうに飲んでいるが、修平は何故かグラスに口をつけたまま、茫然としているからだ。

「あつ、ゴメン。ちよつと気にかかることがあつて。別に会社とは関係ないよ」

修平はワインを半分ほど一気に飲んだ。

「タコと菜の花のピュアレでございます」

とウェイターが前菜を二人の前に置いた。

「おいしそうだなあ、食べよ」

修平はフォークを手に取り、食べ始めた。それを見ていた冴子はクスツを笑い、ナイフとフォークを手にとってタコに菜の花を絡め、口に運んだ。菜の花の香りが口の中に広がり、タコの軟らかな歯ごたえが、春を感じさせていた。

「これ、すつごく美味しい！」

「うん！」

修平もこの味には満足していた。

「ところでさあ、冴子。ヨーロッパの事詳しいか？特に歴史だけ」

「えっ、歴史、ヨーロッパの？」

「ああ」

「どこ？わたしの専門はフランス革命よ」

「えっ！フランス革命？えー、ジャンヌダルク？」

「そう当り！」

冴子はおいしそうにワイングラスを手に持ちおいしそうにワインを飲んだ。

「じゃー、質問だけどヒトラーの事知ってる？」

「ヒトラー、あのドイツの？アドルフ・ヒトラーの事」

「うん」

「あまりよく知らないけど、ヒトラーがどうかしたの？」

「いや、よく分からないんだ。HPにハーケンクロイツとヒトラーの写真が出ていたんだ。他にもあるんだが、さっぱり判らなくて」

「ふーん、じゃー、そのHP教えて。後で見えるから」

「だめだよ、パスワードで保護されてるから」

「されじゃ、今度の週末修平の家に行くわ」

「そうか、そうしよう」

テーブルの上には、メインディッシュの魚料理が運ばれていた。

「わぁー、おいしそう」

冴子が嬉しそうな声を上げて、ワイングラスを置き、ナイフとフォークを手に取り、皿に盛り付けられた魚を見つめていた。

「話は今度にして、じっくり味わおう」

「うん」

修平の携帯が鳴った。出ると中島からだった。

「修平、慎一の件だけど」

「ああ」

「あんな殺されかただったろう。通夜は今日親族だけで済ませたそうだ。告別式は明日1時から、近くの万松寺でやるそうだ」

「ありがとう」

修平は電話を切った。

忍び寄る魔の手

アメリカ、ロスアンジェルス市のあるビルの八階で、二人の紳士が会談していた。

「シンジ・コンドウは神の元へいきました」

「そうか、例のありかは突き止められたのか」

立派な椅子に座っている恰幅のいい紳士は葉巻に火をつけながら聞いた。

「それが、皆目見当が付きません」

髪の毛がブロンドの背の高い年格好が三十前のその男は、眼が大きく、鼻筋が通っており

かなりのハンサムといえたが、紳士の前で少しビビッていた。

「なんだと！判らぬと！それで俺の所へ平気な顔で来たものだ」

「ですが、ボス。シンジはなかなかの切れ者で、どこへ隠したのか家の天上から床下まで調べたんですが何も出てきません」

「友人関係は調べたのか？」

「彼の友人彼女すべて調べましたが、何も出てきません」

「電話の記録も調べたのか？」

不服そうに、そのボスは声を少し荒げて聞いた。

「もう一度調べ直せ。Internetの接続も調べよ。今度手ぶらで俺の元にきたら、すぐさま地獄に落としてやるからな」

「わ、わかりました」

その男は脅えるような感じでドアから出ていった。

近藤慎一の葬儀の日は晴天のよい日和となった。修平は喪服を着て出かけた。会社へは欠勤する旨昨日上司の上田課長に伝えてあった。少し離れた所に見慣れぬ外人の姿があった。どうやら弔問客を一人一人チェックしているようだったが、誰も気に留める者などいなかった。修平は焼香が終わり、帰ろうと道路にでた。ふと、見

た先に金髪の外人の姿が

あった。それも二人いた。何だろう？と思ったが、気に止めずに振り返って反対方向に歩きかけたその時、ふとある考えが浮かんだ。あの二人は、もしかして慎一を殺った一味？

謎の宝を追いかける人物？えっ？と、思い振り返って確認しようと思ったが、もし振り返って怪しまれたら大変と、そのまままっすぐ進み、道が交差している所まで来ると、右側に塀があり隠れ場所になるので、曲がった振りをして身を隠し、外人の方を見た。

二人ともサングラスをしており、顔ははっきりわからない。しかし、慎一の葬儀に出入りしている人物を見渡しているようだ。（もしかして慎一の死に関係があるやつ？）

「おい」

誰かが背中をポンとつついた。修平はビクツとして後ろを振り返った。

「びっくりしたな、もう。弘治か」

「どうしたんだ？そんなにびっくりして。そんな所で何やってんだ？」

「しっ」

修平は弘治に静かにするように口に指を当てた。

「あつ！やばい！」

外人のうち一人がこちらの存在に気がついたのか、早い足取りで近づいてくる。

「逃げろ！」

修平は弘治の腕を掴み、必死で走った。二百mほどほぼ全力で走った。息が激しくしばらく話することができない。諦めたのか後はもうつけられていなかった。

「ジョージ、わかったよ。近藤が連絡をとっていたところが」

「WHAT？ナオキ」

ジョージは直樹から近藤慎一の通話記録から有力な人間を見つ

けたこと、HPの存在も確認し、その鍵はその男・昔の同級生・が握っている事を聞いた。

「近藤はサーバーに鍵となるデータを隠していたんだ。そのパスワードはどこにも書いていない。誰かに密かに教えているに違いないと考える。その誰かかは、電話を直前にかけている一人。それが岡島修平だと考える」

「そのオカジマという男は何者か？」

ジョージは煙草に火をつけながら聞いた。

「それはまだ調べていない」

「すぐに調べるんだ！」

ジョージは手でピストルの格好をして直樹の頭を狙う格好をした。

「わかったよ。調べりゃいんだろっ」

直樹は同じように手でピストルの格好をして、ジョージに狙いをつけながら部屋から出ていった。

週末の土曜日、修平の家に冴子がやってきた。

「おはよう、修平」

「おはよう。ようこそわが御殿へ」

「すばらしい御殿ね」

修平は冴子を居間に通した。

「何か飲む？」

「何もいらない。考えたらワクワクしちゃって」

「それじゃ、パソコンはこっちの部屋なんだ」

と修平は先に歩き、扉を開け、冴子を先に部屋の中に入れた。机とベツトが置いてあり、机の上にはパソコンが乗っていて、幾何学模様のスクリーンサーバーが画面をにぎやかにしていた。

「じゃ、いくよ」

IEを起動し、アドレスを入れてOKを押した。

雷鳴が轟き、パスワードの要求が来た。修平はキーボードからパスワードを入れて、OKを押した。ハーケンクロイツのマークにやが

てヒトラーの顔が出てきた。

「すごいホームページね。この先は？」

「ここから先が問題なんだ」

修平はハーケンクロイツのマークをクリックした。

「最初の難関です。キーワードを入れてください」という文字が表示されており、入力を待っている。

「一度間違えると、Y A H O O に移動してしまうようになっている」

「修平の渾名では無い訳ね」

「ヒトラーとか思い付くものを入れてみたけどだめだった」

と修平は思い付くものはもうないという風に両手を挙げた。

「ここは何？」

「ヒントがあるんだけど、何を意味しているのかさっぱり」

「ヒント出してみても、私にわかることがあるかも」

「だめだと思うけど、見てみる？」

修平はヒントな箇所をクリックして違う画像を表示した。

「何これ？どこ？どこかの宮殿の中？」

「だろう。これが何処で何を意味するのかわかるかい」

「無理みたいね」

冴子はわからなかった。今までヨーロッパの宮殿のほとんどは写真で見たことがあるが、この写真だけは全く記憶にないところであった。

「やっぱり、ヒトラーの事を調べましょう」

と冴子は修平に早く図書館にいくと言った。二人は支度を整え、愛知県立図書館へと

向かった。

二人が外出した後三人の男が修平の家の前にいた。一人は家の外にいて見張りの役であり、手にはトランシーバーを持っていた。もし、緊急事態が発生したら、危険を知らせるためである。

当然その役目は日本人だった。後の二人はラテン系の顔立ちなので、外で通行人に見られるだけでも覚えられやすい。

「どうも留守のようだ」

「じゃ、手筈通りに事を運べ」と流暢な日本語で一人のラテン系は答えた。それがリーダーのようであった。

その扉はリーダーとは別の男がいつも簡単に開けた。

「ちよろいもんさ」

二人は中に入り扉を閉め、トランシーバーで中に入ったことを告げた。二人はあたりを物色したが、机上のパソコンを見ると近づき、スイッチを入れた。パソコンが立ち上がるとマイコンピュターを開いてディスクの中を調べはじめ、次にインターネットに接続を開始した。接続を完了したパソコンの画面はY A H O Oのホームページになっていた。次に

オプション設定を開いて、最近開いたアドレスを調べ始めた。

「あつたぞ」

その男はにやりと微笑むとそのアドレスの場所を書きとめた。そして、そのアドレスをキーインして問題のHPを閲覧した。

「ふふふッ」

HPは雷鳴が轟き、パスワードの要求が表示された。通称ビリー呼ばれている男はその欄にSh u h u h e i と入れてE n t e r キーを押した。だめだった。

「クソッ」と言いながら次の文字を打ち、再度ログインしようと試みたがだめだった。

「このアドレスがわかっただけでも収穫さ。あとはプロに頼もう」
アプリを終了して電源を切断した。

「こちらコヨーテ。作業完了」

リーダーは見張り役の日本人にトランシーバーで連絡した。

「ハゲタカは飛んでいない」

見張り役はしばらくして応答を返した。侵入した二人は玄関から出て鍵を元のように閉めた。三人は周囲を見渡すと何食わぬ顔で近く

に止めてある車まで世間話をして歩き、車に乗り込むと走りさった。修平と冴子は図書館につくと百科辞典でヒトラーの事を調べ、西洋史のコーナーに行き第二次世界大戦の中からヒトラー関連の書物を調べた。

「わからないな？あの宮殿みたいなのはなんだろう？」

「修平、でもきつと何か関係あるものがあるのよ」

冴子はヒトラー関係の書籍は見るのを止め、宮殿の載っている書籍を探してめくり始めた。

ヨーロッパの宮殿関係の写真集や書物も意外と多い。3冊目に手にした本をめくっていると、ふと見覚えがある小さな写真があった。それはあまりにも小さすぎてそのページをめくりすぎてしまったが、アッ！と思い元へとページを戻した。

「あつた！修平。あつたよ。ここだよ」

修平は手に持っていた本を棚に置いて冴子の所に急いでやってきて、その小さな写真を見た。まぎれもなくHPで見たものと同じ宮殿であつた。

「名前はアルトシュテッテン城。えーと、一九一四年サラエボで暗殺されたフランツ・フェルディナントの居城ね」

「ヒトラーと何の関係？」

「多分関係なしね。ハプスブルクとは関係があるけど。なにかしら。しいていえばヒトラーも第一次大戦には出征している」

「??？」

修平は考えた。

「ということは」

「ヒトラーは目をそらすため。相手をごまかすためかも」

冴子は修平の考えていたことを先に口に出した。

「感がいいね。でも、それだけだろうか？」

修平は親指を立ててやったねと言いたげだった。

「私、冴子だもん」

「フツ、やられた。よしすぐに帰って続きだ」

「うん」

修平の家に帰った二人は、太陽も沈み始めて暗くなりかけていたので電器のスイッチを入れて灯りをつけた。

「私お手洗いかりるね」

冴子はトイレに急いで入っていった。

修平は自分の部屋にあるパソコンにいき電源をいれた。だが、ふと先ほど出かけたときと違うように感じた。冴子がトイレから出て部屋に入ってきた。

「どうしたの？」

「確かここに置いたはずのペンがこのペンケースに入っているんだ」

「エッ？」

「変だな？」

その数分後、修平はその事実が真実だということに気がつくことになる。

修平はパソコンのセキュリティをチェックしたが、ウィルスのは確認できなかった。

だが、何かおかしいと感じて電源とファイルの動作確認システムの監視状況を見てみた。そこには、外出している時間に電源が起動されたこと、ファイルがコピーされていることがわかった。

「何だ？ 大変だ！」

「どうしたの？」

「誰かが僕たちが留守の間にこの家に侵入して、このパソコンからファイルをコピーしていったんだ」

「エッ、なんですって」

冴子は鳥肌がたってきているのを感じていた。

「それも、今僕たちが探しているものをだ」

「・・・」

冴子はもう怖くて声が一瞬でなくなっていた。修平はこれはただな

らぬものにかかわってしまったと思った。

「警察に電話しましょう」

と冴子が声を震わせながら言った。

「電話をした所で何も出ないだろう。指紋なんか残して置く訳ないさ。こちらこそスペシャリストが必要だ。明日先輩に頼んでみよう。

君はこれ以上は危ないから手伝わなくていいよ」

「うん」

と言ったものの冴子は怖いもの見たさも心の片隅に残っており、修平だけに危険な負担をさせておくのも自分に許せないところもあった。

「今日はこれまでにしよう。家まで送っていくよ」

「はい」

暗号の糸口

翌日の日曜日は朝からいい天気にもぐまれたが、修平は色々考えが頭の中を駆け巡りぐつぐつと眠れなかった。9時頃起き上がるとカーテンを開けた。眩しい日光が部屋の中を照らし出した。トイレに入って用を足した後に顔を洗う間もなく、携帯電話をとり先輩に電話をかけた。

「もしもし、桃田さん、先輩ですか？」

「おう、その声は修平か？何だこの日曜日の朝に？」

「ちよつと話があるんですが、かなり重要でできれば会って話したいんですけど」

「何だかしこまって。彼女にふられたか？」

「いいえ違います。ちよつと大変なことが起きまして。電話ではちよつと」

「わかった。それじゃ、どこで会う」

「あまり人に聞かれたくないんで、できれば先輩の家が」

「そうか、それじゃ十二時に昼飯でも食いながら」

「はい、わかりました。十二時に伺います」

桃田は修平と同じ名古屋中央大学の卒業で修平の二年先輩にあたり、卒業後はCBM株式会社に入社し、システムセキュリティの仕事を担当しており、特に暗号技術を利用したシステムは業界から賞賛される評価を受けている。

桃田は地下鉄一社駅から徒歩で十分くらいの所にある建売住宅に住んでいる。二年前に結婚し六ヶ月になる女の子がいる。修平は十一時四十分位に一社駅に到着した。ゆっくり歩いて十二時前には桃田の自宅のベルを押していた。

「こんにちは、修平です」

「おう、今開けるから」

桃田はＴシャツにジープンの格好で玄関を開けた。

「おう、よく来たな修平。時間より早いじゃないか。珍しいな」

「先輩昔と違いますよ」

修平は集合時間にはいつも遅刻していた常習犯だった。

「もうすぐ食事の用意ができるからな。まあそれまでこちらで座っていてくれ」

「では、お邪魔します」

そこはリビングとキッチンが一緒になった部屋で１５畳程の広さがあつた。キッチンでは

桃田の妻早苗が昼食を作っていた。

「こんにちは」

「いらつしゃい」

早苗は忙しく作りながらも笑顔で訪問客に挨拶した。

「修平俺たちの結婚式以来だな。丁度二年になるか」

「そうです。先輩！相変わらず元気潑刺ですね」

「そうか。おい早苗、覚えているか？俺たちの結婚式でスピーチしたけど」

「ええ、覚えているわ。絶対に忘れないスピーチだったもの」

「ところで、重大な話があると言っていたよな。まさか、結婚するんで式に出てくれて言うんじゃないだろうな」

「違うよ、もっと深刻な話だよ。先輩の知恵を貸してほしいんだ」

「高い報酬だぞ」

桃田は豪快に笑っていた。だが、深刻そうな修平の顔をみて真顔に戻っていた。

「何だ？」

「暗号を教えてほしい。謎解きなんだ」

「暗号だつて？どういう事なんだ」

「それは」

「できたわよー」

早苗が昼食の準備が整ったので会話を邪魔するように少し多きめの

声で呼んだ。

「食べながら聞こう、修平」

「はい、いただきます」

桃田と修平は食卓についた。そこにはおいしそうなオムライスがとサラダが載っていた。

「早苗の得意料理なんだよ、このオムライスは。どこのレストランにも負けないぜ」

「私はあちらの部屋にいますから」

と、二人の重要な会話を察してか、氷を入れたグラスに水を注ぐと出て行った。

修平はオムライスをおいしそうに食べながら桃田に聞いた。

「先週、殺人事件があったのを知ってますか？」

「殺人事件？どういう？」

桃田は暗号の話ではなく殺人事件から繰り出した修平の言葉に戸惑った。

「話せば長くなるんだけど、うーん、殺されたのは僕の友人で高校の時のクラスメートだったんだ。警察には話してないんだけど、そいつ、近藤慎一って言うんだ。殺される前に僕に電話をしてきて、あるホームページの所在と暗号をメールでくれたんだ」

「なるほど。その謎解きをしているうちにわからなくなって俺の名前を思いだした」

「これには得体の知れないバックがあるように思います。僕の周辺を調べてたようで、昨日は留守の間に部屋に侵入してパソコンの中を調べたようです」

「で、この俺に解いて欲しいものは？」

「それがまだわからないんです」

と言って、修平は頭を抱え込んだ。

「えっ？」

と桃田はしょうがないやつだなと呆れたような顔をしたが、気を取

り直して修平に聞いた。

「どこまでたどりついたか順序だてて話してくれよ、修平」

「はい」

修平は顔を上げた。

「修平、先に食っちまおうぜ」

二人は途中だった食事を急いで済ませた。

「先輩、ご馳走さます。すごくおいしかったです」

「そんなことはいいから、早く話をしろよ」

修平は今まであったことを順序だてて話を始めた。桃田は一句一句聞きもらすまいと慎重に聞いていた。

「今の所はここまでです」

一方的に聞くと桃田は修平に聞いた。

「キーワードは隠されているが、暗号というほどのものではないな。何かメールで送ってきたものに記号みたいなものはなかったか？」

「そういえば古い地図みたいのが添付してあったけど」

「それだな、今持っているか？」

「僕のWEBの書庫に入っているんで、ここで見れますよ」

「よし、じゃ俺の部屋にいこう」

二人はリビングから桃田の書斎部屋に入ってしまった。コンピューター関係の書籍が本棚を埋め尽くしており、机の上にはデスクトップ型の十七インチディスプレイが置いてあった。

「さすが先輩、いいマシン持ってますね」

「おう、MBC性の最高マシンだ。二年前だけどね。いまじゃ2流にダウンだ」

桃田はパソコンの電源をONにしてレディ状態になるのを待った。

「俺の愛車だな。片腕としては最高のマシンだよ」

と桃田はパソコンを撫で回しながら言った。

「先輩はもうパソコンを完璧に使いこなしていますよね」

「もう一人の女房ってとこかな」

パソコンがレディ状態になったので、桃田はインターネットに接続を開始した。

「アドレスは？」

「僕が入れますよ」

と、修平はキーボードを借りて、アドレスをいれた。

修平が仕事上で使うWEBのデータ管理であり、その一つを使つてその地図は隠されていた。IDとパスワードで管理されてるので、一応安心といえる場所であり、まさかここに地図を隠しているとは誰も知らなかった。

「修平、隠す場所を考えたな。そう簡単には気がつかないぞ」

画面には、古地図が表示された。桃田は見た瞬間にそれが海賊が持つ宝探しの地図のような印象を受けた。

「これじゃまるで、海賊の気分だな。まずこれは古いものなのかだか？」

「先輩、これは近藤がどこかで手に入れたものだと思いますが、手がかりは近藤のHPから探すしかないということです。そのHPを見ますか？」

「うん、いや、その地図をもう一度拡大して見たい」
修平は拡大した。

「この地図には古い城と高く聳える山と鬱蒼としげる森、そして細く蛇行する川が描かれているだけだ。そして、一羽の鷹。隠しキーとなるものはない」

「そうでしょう。見ていても何もわかりません」

「だが、ちよつと待てよ、鷹の目の部分をよく見ると色が変わぞ」

「えっ、そういえば」

よく見ると鷹の目が黄色いのだった。

「こんな色は使わぬだろう」

「でもこれが何と結びつくのです」

桃田は大きく息をつきながら、少し考えこんでいた。そして指を鳴らすと

「修平この画像の形式は何だ？」

「JPEGだけど」

「JPEGって、ふーん？」

「だけど、原画はビットマップだよ。サイズが大きいから形式を変えたんだ」

「何だって？ビットマップはどこにある？」

「ああ、同じ場所に保管してあるよ」

と、修平は同じ場所から画像を表示した。ビットマップ形式だから表示には先ほどよりしばらく時間がかかった。

「よし、ひよつとするとどこかに暗号がかくされているかもな」

桃田は表示された画像を一旦パソコンに保存してから、メモ帳を開いてファイル名をクリックしてその画像の中身を表示した。修平はその訳のわからぬ内容を見てびっくりした。修平も長年パソコンをやっているが、画像データの中身を見て文字を探す行為は初めてだった。

「先輩、ここに何か隠されているんですか？」

「おそらくな。高度なテクニックだ。果たして解読できるかだが、できるだけやってみよう。時間はかかるぞ」

桃田は椅子を直してパソコンの画面と正対した。

「まずは、このデータを2進数に変える。そういえば紙テープを知っているか？」

「ええ、見たことはありませんが、講義の中でありましたので」

「紙テープは穴が1で穴なしが0だ。いわゆる2進数だが、うまく使えば暗号となる」

画面の文字が2進数で1と0になった。

「今度はこれでは人間がわからぬから16進数にする。16進数はわかるだろう」

「はい、入社当時プログラム作成の時に、漢字を置き換えてプログラムさせられましたから。大変ですよ。よくもこう考えたもんだ。漢字は大変だ。アメリカ人になればよかったと思いましたね」

「わかるなその気持ち。コンピューターに漢字を登場させた人には敬服するよ。よし16進にかわった」

「それからどうするんですか？あつ、わかった。イエローを探す」

「おう、気がついたか」

桃田はイエローの色を表す16進をいれて検索した。カーソルはそこで止まった。

「さあ、ここからが問題だ。鍵を探さないと暗号は解読できないからな」

桃田は一旦10進数に変換した。そのイエローの記号の前後を確認した。その後ろに“マ”の字があつた。

「何だろう？この“マ”とは」

「あつ！」

「どうした修平」

「先輩多分俺のあだ名ですよ」

「あだ名？」

「マントヒヒ」

「マントヒヒ？そりやいい。暗号解読は近いぞ」

桃田はマントヒヒの文字を探し、その文字にあわせて配列を変えた。その文字をつなぎあわせると重大なことがその地図には隠されていることがわかった。

二人は顔を見合わせたまま言葉がでなかった。

桃田はその言葉は16進で30BF30AB30E930DE30CEとあつた。日本語にすると、タカラモノわかった。

「タカラモノ？何ですかね先輩」

「これだけでは何も解読にはなっていないな。これはひょっとして偽装工作かもしれん」

「偽装？」

「そつだ。暗号は見破られるもの。それを防ぐためには色々な手段をとるんだ」

桃田はそのあとキーワードとなるものを探したがなかなか見つからなかった。その日は結局他に何も見つけれなかった。

「なかなか難敵だなあ。よほど重要な内容が隠されているかもしれないぞ。何せ命を狙われるぐらいだからな。後は俺に任せておけ」

「先輩！是非お願いします」

修平は充血した目をしきりに瞬きさせながら桃田に頼んだ。先輩だけが頼みの綱だった。

桃田は2日間必死にキーワードを探した。すると、もう一つの言葉が発見された。それはジとマとンであつた。桃田は何だろうこの言葉はと思った。組み合わせを変えるとマンジと読める。マンジとはあの卍のことだろうかと思つたが、それがキーだとすると何をどう解読したらよいのかわからなかった。桃田は夜9時に修平の携帯に電話をかけた。

「修平、俺だ」

「先輩！解けましたか？」

「うーん、それがなかなか手ごわい。修平マンジで思い浮かべるのとあるか？」

「マンジ？マンジってあのカギ十字？」

「ああ、もう一つ言葉が見つかったんだ。マンジとね」

「先輩、それですよ。HPにもハーケンクロイツの旗印が。あのヒトラーの」

「おう。ひょっとして。わかつたまた電話する」

桃田はふとそのキーの意味するところが解読できた。パソコンの前に向かいその画像の中心から卍の形に切り取ってみた。そして、その中にかくされている言葉を分析した。格闘すること2時間、別の画面に解析された文字が浮かび始めた。

ハプスブルクノダイヤレッドマリーハアンゼンナトコロニカ
クサレテイル

ソノバシヨハイズレアキラカニナル

画面に浮かび上がった文字を読んで桃田の心は動揺した。

「こ、これは」

桃田は携帯を手にして、修平に電話をかけた。

「おい、修平！ついにやったぞ。解読成功だ」

「やった、先輩！さすがっ」

「すごい内容だぞ。いまその内容をメールで送る」

桃田はメールソフトを起動すると、解読文をコピーして修平宛に送信した。もちろん万一のために暗号化していた。

修平はメールを受け取るとすぐ暗号を解凍してその内容を見た。

携帯はそのままつながった状態だった。

「先輩！これはすごい内容ですね。近藤の命が狙われたわけがわかりました。財宝をめぐる争いに巻き込まれたんだ。今度は俺らの番か。ハプス」

「修平シツ！電話は盗聴される恐れがある。これ以上は明日会って話そう」

桃田は明日仕事が終わった後、午後六時に栄の中日ビルで会うことにした。

道路の脇に車が止まっていたが、修平はもちろん何も気づいていなかった。

桃田の妻早苗が書斎の扉の向こうから声をかけた。

「あなた、お風呂沸いてますよ」

「おい、早苗！」

早苗が扉を開けた。

「はい？」

「おまえ確か大学の専攻は西洋史で卒論はハプスブルクを研究していたんだよな」

「えッ？そうよ。よく覚えていたわね。だけど、なに？」

「うん、いまちょっとしたことから、ハプスブルクの財宝の話が出たんだ？」

「ハプスブルクの財宝？」

「それも高価なダイヤモンド」

「うーん、それならマリー・アントワネットが夫ルイ16世から贈られたホープダイヤね。」

「サファイアブルーのダイヤはその所有者に不幸をもたらした呪われたダイヤよ。今はスミソニアン博物館にあるはずだけど」

「ヘー、すごいダイヤがあるんだな」

「レッドマリーという名前のダイヤは聞いたことある？」

「いいえ、その名前は知らないけど。マリーと言われるからにはアントワネットと関係があるかもしれないわね。面白そうね。探検みたい」

「それがそうじゃないんだ。こないだ修平が来ただろう」

「あつ、大学の後輩の」

「桃田は早苗に今までのことを詳細に話した。早苗の表情はだんだんこわばっていった。」

「怖い。かわって大丈夫？」

「うん、でも放っておくわけにもいかないし。大学の教授で詳しい人知っているか？」

「ええそうね、名古屋中央大学の渡辺誠司教授がいいと思うわ」

「明日電話して聞いてみるよ。ありがとう」

「あなた気をつけてね」

「桃田は翌日渡辺教授に電話をかけて、色々と質問をした。」

「わたしもそのレッドマリーの事は聞いたことがないね。そうだ、ミュンヘン大学にハプスブルグ研究の第一人者がいるから一度尋ねておくよ」

「ありがとうございます。勉強になりました」

「あまり役にたてなくてすまない」

「いいえそんなことはありません。では失礼します」

「桃田は電話を切ったが思ったように成果はあがらなかった。」

「あなた、だめだったみたいね」

早苗は桃田の顔の表情から成果を得られなかったことを察知していた。

「うん、行き詰ったよ」

「ハプスブルグの財宝は膨大な量よ。レッドマリーはその中のたった一つのもの。どんないわれのあるお宝かわからないけど、きっと何か手がかりがあるはずだわ。それも行方知れずになっている大切なもの」

「だろうな。それも正体のわからない組織がその獲得に乗り出している？」

「わたしも色々調べてみるわ」

「ああ、頼むよ。じゃ行ってくるよ」

「はい、いつてらっしゃい」

盗聴のわな

修平は朝出勤すると冴子に内線をかけた。

「どうだった？修平」

「暗号がとけたよ」

「本当？」

「ああ、詳しいことは仕事が終わってからゆっくり話すよ」

その日冴子は同僚の沢口恵子と昼食のために久ぶりに社外のランチをしようと外出した。いつもビル内の社員食堂だけでは厭きてしまっからだ。

「今日どこにしようか」

「K喫茶のランチ？それともイタめしのランチ？それとも」

恵子は色々な店のおいしそうなものを並び立てた。

「そうね、わたしは今日はトンカツかな」

冴子は右手の人差し指を掲げてにこやかに笑いながら言った。

「じゃ、賛成する」

二人は一筋目を回ったところにあるトンカツ専門店に入った。結構混んでいたが、丁度今精算をしている人が座っていた場所が空いており、店員が食器を片付けにテーブルに向かっていった。

「お二人様ですね。こちらへどうぞ」

二人はその場所に座るよう案内された。食器が片付けられ、二人は座りお茶とおしぼりが運ばれてきた。

「ご注文は？」

「えーと、B定食」

冴子は迷うことなく注文した。

「じゃ、わたしも同じBで」

「はい、B定食お二つですね」

学生バイトらしい定員は注文を繰り返すと、早足で厨房の方へと向

かった。その時、一人の女性が入ってきた。

「お一人様ですか？」

「はい」

「カウンターが空いてますので、カウンターでお願いします」

少し大きめのショルダーバッグを提げていた女性はそのバッグの紐を肩からはずすとカウンターへと向かった。丁度冴子の横を通らないとカウンターへは行けなかった。

冴子は通路側の椅子にバッグを置いていた。その女性は、冴子のバッグが置いてある椅子にぶつかり、倒れるのを防ぐために椅子に手をそえた。その時に冴子のバッグは飛ばされ下に落ちてしまった。

「あつー、イタッ」

冴子はちよつとびっくりして、大丈夫ですか？と声をかけてバッグを拾おうとした。

「あつ、ごめんなさい」

と、その女性は冴子の落ちたバッグを拾い上げて椅子の上に戻した。

「大丈夫ですか？」

店員が駆け寄ってきて、その女性に怪我がないか聞いた。

「すいません。大丈夫です。ちよつとボツーとしていたもので。バッグごめんなさい」

と言ってあやまったので、冴子は頭をぺコリとさげてその女性がカウンターの方に行くのを見つめていた。

「何ぼうーとして歩いているのかしらね」

二人は変な人にはかかわりないと思い、その後は無視をして、運ばれてきたB定食の味を楽しむことにした。

「トヨコ、首尾は？」

「間違いなくバックに取り付けました。感度は良好です」

「ご苦労。後は次の指示を待て」

「はい」

二日後、名古屋港の堀川口で女性の変死体があがった。その女性が冴子がトンカツ屋で出会った人物であったことに気がつくのは、もつと先のことであった。

変な出来事の日之夜 といっても冴子はもう忘れていたが 修平と冴子は中華料理屋にいた。

「仕事お疲れ様、乾杯！」

修平はグラスにつがれたビールをおいしそうに半分ほど飲んだ。

「で、どんな内容だった？」

「それがすごいんだよ。先輩の暗号解読には頭がさがるよ」

その中華料理店の近くに車がとまり、その助手席では男性がヘッドホンをあてて何かを聞いていた。

「レイノアングウハ、レッドマリートイウハプスブルグノダイヤラシイ」

「ソレスゴイワネ。デモレッドマリートイウダイヤドレクライノモノナノカシラ」

「マツタクワカラナイガ、ユウジンガコロサレテイルンダカラ・・・」

「シッー、アマリオオキナコエヲダサナイデ」

「暗号とか言ってますが、やばくないすつか？」

「われわれはただ依頼主に言われた通りにすればいい。だがダイヤがどうのこうのと言っているから財産目当てのことじゃないか？」

「兄貴、どうします？」

「どんないやな事でもやらなきゃいけない商売さ。このテープを依頼主に渡すだけさ」

停車していた車 車種はセドリックだった はヘッドライトを点灯して動き出した。30m程行くと交差点があり信号が赤から青になるところだった。前方に車も停車していなかったので、アクセルをゆるめることなく行こうとした時であった。猛スピードで信号無視をした車がセドリックめがけて飛び込んできたのだった。

キー！急ブレーキの音

「アッ！ボ」

ドーン！、バーン！

暴走車はセドリックの運転席の横腹に突っ込んだ。セドリックは弾き飛ばされた格好になり中央分離帯にある信号機に助手席側がめり込み、信号機が曲がるほどの衝撃でセドリックは滅茶苦茶になっていた。突っ込んだ車はボンネットは曲がって浮き上がりラジエターが損傷したのか蒸気をあげていた。

交差点近辺にいた車の人たちは呆然とそのすごい事故を目撃した。しばらくすると誰かが通報したのか救急車のサイレンの音が聞こえてきた。

修平と冴子は外がやけに騒々しいのに気づいた。救急車のサイレンが近づいてくるのもわかっていた。二人はまだ食事の途中であり気にはなったが車同士の事故だけが人でもでたのだらうと思った。救急車のサイレンが止まりしばらくすると再びサイレンを鳴らして現場から去っていくようだったので病院へ運ぶんだというぐらいの想像をしていた。しばらくすると、二人連れの中年サラリーマンが中に入ってきて、隣のテーブルへ座った。

「ひどい事故だな。運転手は即死みたいだな。助手席にいたのも重傷だぞ」

「ああ、で突っ込んだ方はエアバッグのおかげで軽傷らしいぞ」

「無理に赤信号で突っ込んできてお陀仏じゃたまらんぞ」

二人は自然に入ってくる会話を食べながら聞いていた。

「ねえ、すごい事故みたいね」

「うん、でもあまり事故現場はみたくないね」

修平も冴子もその事故の被害者が自分たちを監視していた人物だったことは露とも知らなかった。食事が終わりと外へ出るとまだ野次馬が交差点の周囲にいて事故現場を眺めていた。路地の灯りに照ら

し出された無残な姿になった車が見え、警察が現場検証をしていた。
「修平、見たくないからこちらから行こう」

「そうしようか」

修平はちよつと見たい気持ちもあったが、冴子が見たくないという心を配慮してかその場から急いで立ち去っていった。

「あいつら遅いなあ。どこかでさぼっとんのか？」

ある事務所の電話がルルルとなった。夜九時であったがまだ灯りがついており数人がなにやら話し込んでいた。

「はい、大下興信所です」

それは警察からの電話であった。

「えっ、そうですか。はい。いまから伺います」

電話は切れた。その所長の表情はこわばっていた。

「所長、あいつらどうかしましたか？」

「交通事故でチュウはあの世、セコは意識不明だと」

「エッー！事故？」

「とにかく病院へいつてくる」

「あつしらもいつしよに」

「いや、俺一人でいく。ちよつと気になることがあるので連絡するまでお前からここにいてくれ。いやタケ、お前一緒にきてくれ」

「わかりました」

所長の大下はハンガーにかかっている背広をとり素早く着ると車のキーを持ち出ていった。

タケが後ろからついていった。大下は病院へと急行した。セコは集中治療室で医師たちによる手術を受けているところであった。警察官が二人いて事情を聞いた。事故車は大破して潰れているので、トラックの荷台に載せてとりあえず中警察署の駐車場に置くという。

「車を見にいいいですか？」

「？いいですよ」

大下は病院にタケを残して中警察署の駐車場へと向かった。到着

すると丁度車をトラックから降ろした所であつた。

「すいません。この車を運転していた者の会社の所長ですが、ちょっと車の中を見ていいですか？大切なものを持っていたんで」

「ああ、いいですよ」

大下はスクラップ同然になつた車の中に首を突つ込んだ。外灯だけでは中はあまり見えないので、ポケットからペンライトを出して照らした。赤黒く血糊らしい跡も光の中に浮かんだ。なんとも言えない血の匂いとオイルの匂いが漂っていた。黒いカバンを見つけると外へ出して中を見たが、目的のものは入っていないかつた。再び中に入つて辺りを探したが何も他に見つからなかつた。

（ひよつとすると事故現場に落としたままかも）

と思つた大下は礼を言つと、今度は現場へと車を走らせた。しかし、そこには綺麗に片付けられており、ガラスの細かい破片が落ちているだけで目的の物は発見できなかった。

「どこにいったんだ、畜生！」

事故が発生し救急車がきて救急隊員が助手席から重症の男性を運び出すときは、手にそのあるもの - 録音したテープ - をしっかりと握りしめていたが、担架に乗せるときには手からスルリと抜けて路上に落ちた。だれもそれには気づかなかつた。ある一人を除いてはその一人 - 帽子を深めにかぶり眼鏡をかけていた - がそのすぐあとに車の中を窺うように近づいてその落ちていたテープを拾い取ると素早くポケットにいれ、すばやくその場を離れ近くに停めてあつた車で静かに走りさつていった。

翌朝、修平は会社のビル前で冴子の来るのを待つていた。今朝はよく晴れているが、風が強めに吹いており、向こうからかってくる冴子の髪の毛が風に揺れていた。修平は軽く手を振つた。冴子は修平の姿をみると小走りに走りよつてきた。修平はその姿を見てほほえましい顔になっていた。

「おはよう。どうしたの？」

「おはよう。話があったけど仕事が終わってからにするよ」

「えっ？なに」

「行こう」

修平は冴子の顔を見たときたん昨日の暗い事故の話など朝からするのはよそうと思った。仕事場で冴子は、修平が話があるといったことがどうも気になって思うように仕事が手につかなかった。そこで、お昼前に修平の席に内線電話をかけてみた。

「はい、システム岡島です」

「修平さん、冴子・・・」

「ああ、冴子。どうした？」

「お昼どうするの？」

「まだ決めてないけど」

「それじゃ、一緒に外でランチしない？朝の話して気になって・・・」

「そうだな。そうしよう。十二時に一階のロビーで」

「OK！」

冴子は修平をさそってランチに外へ出た。そこで何の話かと思つて聞くと昨日の夜事故らしい事が起こったが、それが二人が死亡する事故だったことを告げたのであった。事実は二人にとっては重大なことであつたが、冴子はそんな話のためにやきもきしていたと思うとおかしくなつた。

「新聞を見たときはほんとにびっくりしたよ」

「もう、修平ったら私はもつと重大なことだと思つたのよ」

「興味なかった？か。ごめん」

「もうそろそろ時間よ。帰りましょう」

冴子は少し気分を害していた。立つたときにあまりにも勢いがあつたので椅子に躓き、その上に置いてあつた自分のバッグが床に落ちていた。それを拾いあげようとした時に何か取れているのに気がついていた。

「あつ、とれちゃった!」

冴子はその落ちたものを拾った首をかしげた。

「これどこのかな?」

「見せてごらんよ」

と、修平はその落ちたものを手の平に載せた。目に近づけてみたが、黒いプラスチックのようで裏には粘着性のボンドのようなものがついていた。

「なんだろう?あとで調べてみるよ」

修平はハンカチを出しそれくるんでポケットにしまった。職場に戻った修平はしばらくすると思い出したようにハンカチを出し、その不明なものをそつと手にもち一回り眺めてから机の上に置いた。次長の坂上が偶然にその動作を見ていて、不審な様子なので修平の所まで近寄ってきた。

「どうしたんだ、それ?」

「彼女のバックについてたのがとれたんですが、何か変なんですよ。次長」

「ちよつと見せてみる」

坂上はその黒い小さな物体を手に取り眺めた。

「あつ?」

見て何か思いついた様子だった。

「ひよつとすると・・・」

坂上は高性能盗聴器ではないかと思ったが、いま一つ確信がなかった。ただ一人部内に詳しい人物がいた。

「井上はいたか?」

「ええ、今隣の部屋でパソコンを修理していますよ」

「ちよつと呼んできてくれ」

近くにいた馬場が呼びにいった。しばらくするとまん丸顔の井上がやってきた。

「何ですか?急用ですか、次長」

「ちよつとこれを見てくれ」

井上は次長から黒い物体を受け取るとじつと見つめ回した。

「これ盗聴器ですね。それも高性能で多分米国製だと思います。CIAがよく使っているやつですよ」

「えっ？」

次長がやはりそうだったと思ったが、それがCIAという言葉が出て思わず声を出した。修平はあまりにも突然の出来事に啞然として言葉もでなかった。

「でも、何でこれがここに？」

井上は、こんなものが何故ここにあるのかが知りたかった。

「岡島君の彼女のカバンについていたらしい」

「修平、何か彼女と揉め事があるんじゃないのか？」

「そんなのはないよ。だけど・・・今はちよつと言えない」

「何だつて？まあ、プライベートのことだからいいけど」

次長はそれ以上は追及しなかった。

「井上先輩、夜ちよつと飲みにいきませんか？」

修平は聞きたいことがあったので井上をさそった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6438c/>

幻の輝き

2010年10月10日17時06分発行